

国境を越えた俳句のかたち

——北米における五七五の行方——

上田 真 (Stanford University)
UEDA Makoto

北米における英語俳句は、1960年代以降、急速に大衆化が進み、今や英詩の一詩形として、その地位を確立しつつあるといえよう。この事実は、W・H・オーデンとか、ジョン・アシュベリーとか、エサリッジ・ナイトとか、日本の文化について特に興味をもたない詩人たちが英語俳句を書き始めたことから知られる。アメリカやカナダの小中学校でも、英語の教科書に俳句が出てきて、生徒たちは五七五の詩形で詩を作らされるようになった。

しかし、考えてみれば、これは不思議な現象である。なぜなら、日本の俳句は五七五の十七文字から成り立っていて、その文字はすべて同じ長さで発音される。俳句は、日本語音節の等時性を前提とし、それを利用したモーラの韻律に基盤を置いた詩なのである。一方、英詩の韻律の基本は強弱アクセントであり、これに韻脚を組み合わせることにより、何種類かの詩のリズムをつくる仕組みになっている。つまり、俳句はモーラの韻律、英詩はアクセント的韻律と、リズムの基本が大きく違うのであって、この二つがどういう風にして融合し、新しい英語の詩形をつくることのできたのか、そこが不思議なのである。

私見によれば、この融合には大きく分けて三つのかたちがある。第一は、五七五の音節律を模倣することによって、英語俳句にモーラの韻律を作り出そうとするもの。第二は、俳句と英詩をその中間のところで妥協させようとする試みで、モーラの韻律もアクセント的韻律も、許容される範囲において出来るだけ利用しようとするもの。第三は、その反対で、モーラの韻律もアクセント的韻律もあまり気にかけず、もっぱら即物的なイメージ詩に徹しようとするもの。私は、これら三つのかたちを省察することにより、国境を越えて北米の英語圏に入った俳句という詩形がどう変貌したか、それを少し探してみたい。

まず最初に、英語俳句も日本語の俳句と同様五七五の音節をもたなければならないとする態度であるが、おもしろいことに、今この態度に強く固執しているのは、北米の小中学校用英語教科書をつくる教育者たちである。教科書に出てくる俳句作品は、翻訳であれ創作であれ、その多くが三行五七五音節なのである。これは何故かという、俳句を英語の教材として使う主な理由が、そのリズムの簡潔性にあるからであろう。英詩のリズムは複雑だから、子供たちにソネットを作れといっても、とても出来ないばかりか、詩というものに恐怖心を与える結果になりかねない。その点、俳句だったら、音節が五七五になっていて、季節の感じがありさえすればいいのだから、小さな子供でも、ゲームをやるような感覚で作ることができる。次に挙げる例は、テキサス州ヒューストンに住む7才の女の子が作った俳句である。

buzz, buzz, buzz, buzz, buzz

all I hear is buzz, buzz, buzz
buzz, buzz, buzz, buzz, buzz

Michelle Tomer⁽¹⁾

バズバズというのは蜂の羽音で、日本語でいえばブンブンであろう。春爛漫、花が咲き乱れる野原に来てみると、聞こえてくるのは蜜蜂の羽音ばかりという、のどかな風景が目には浮かぶ。幼稚といえば幼稚だが、どこか山村暮鳥や草野心平の詩を想起させるようなところがないでもない。いずれにせよ、この俳句のリズムはモーラ的で、強弱アクセントは、この詩のリズムの中にほとんど入って来ていない。

英語俳句は、アメリカやカナダの病院で、精神病の治療に使われることがあるが、このいわゆる俳句療法に使われる俳句が、やはり五七五の定型である。その理由も、教科書俳句の場合と同じで、定型俳句が初心者にとって書きやすい詩だからである。だいたいポエトリー・セラピーは、1960年代から使われだした精神病の治療法だが、ふつうの英詩を使った場合、患者の中には拒否反応を起こす人たちがいる。むかし高校の英語の教科書で、ミルトンやブラウニングの詩に悩まされたことを思い出すからだという。その点、俳句だと短かいし、韻律はシラブルを数えるだけでいい。季語に導かれて自然に目を向けることは、重苦しい人間社会の規範から自由になるよすがにもなる。次に引用するのは、俳句療法を受けるまで詩など書いたことがなかったという、カリフォルニアのあるセールスマンの句である。

Afternoon in May:

mosquitoes, birds, grass, flowers,
airplane overhead.⁽²⁾

一行目と三行目にアクセント的韻律が少しあるようだけれども、それは二行目で大きく崩れている。一方、モーラの韻律のほうは、きちんと五七五の定型である。五月という季語もあるし、コロンによって切字的な休止も作ってある。内容は平凡だけれども、有季定型俳句としての形は整っている。

以上の二例は、共に初心者によって書かれた英語俳句の作品だが、これがもう少し経験を積んだ詩作者だと、同じ定型俳句でも、もっとアクセント的韻律に注意を払う。一例を挙げよう。

On Thanksgiving Day
as they walk along the path,
she gives him a hug.

Don Hoatson

感謝祭の日に、田舎の道で、中年あるいは老境に入った夫婦が抱擁している情景であろうが、作者はこの句を作ったあとで読み返してみて、三行目のリズムが気にかかったという。なぜなら、この句のアクセント的韻律は

弱弱強弱強
弱弱強弱強弱強
弱強弱弱強

となっていて、はじめの二行の規則正しい韻律が三行目に来て破れているからである。だから作者は、三行目もやはり「弱弱強弱強」とした方が、リズム感がよくなるだろうと考えた。そして、多少の試行錯誤を経た上で、三行目を次のように変えた。

On Thanksgiving Day
as they walk along the path,
now they stop to hug.⁽³⁾

この改作、どうだろうか。韻律が整った分、他で失ったものがあるのではないかと私は思うのだが、これは難しいところである。何れにせよ、強弱アクセントを重視したからこそ句を推敲する必要を感じたわけで、その例としておもしろい。

もう一句、強弱アクセントを韻律に取り入れた定型俳句の例を引用する。

One breaker crashes. . .
As the next draws up, a lull —
and sandpiper-cries

O. Mabson Southard⁽⁴⁾

この句の強弱アクセントを見てみると

強強弱強弱
弱弱強強強弱強
弱強弱弱強

となっていて、そこには一見、何の法則もないように見える。しかし、よく見ると、最初の二行では一つの波が寄せて碎け、一息おいて次の波が寄せてくる、そのリズムが強弱アクセントによって暗示されている。そして、弱音で始まる第三行は、一つの波から次の波へと移るしばしの静寂の間に、かすかに聞こえてくる海鳥の声と共鳴するかの如きリズム感がある。⁽⁵⁾

以上の二例を見ても分かるように、英語で定型俳句を書く人たちは、初心者とすれば、強弱アクセントにもかなりの注意を払うようである。アメリカの俳句雑誌『モダン・ハイク』を主宰するロバート・スピースは、五七五のモーラの韻律をジェネリック・リズム、アクセント的韻律をスペシフィック・リズムと呼び、英語俳句はこの二つを兼ね具えていなければならない、と教えている。ジェネリック・リズムは、人間一般に共通する「いのち」であり、スペシフィック・リズムは人間各自のもっている個性だ、とも述べている。これは、日本の俳句でも、昔から名句

といわれている作品は、五七五のモーラの韻律の他に、強弱アクセント的な要素も微妙に取り入れているのであって、それに対応するものであろう。結局のところ、すぐれた詩人というのは、どんな国語で詩を書こうとも、その言語の音韻的要素を最大限に活用しようとするものなのである。

スペースはもう70才を越え、英語俳句界の長老の一人だが、もう少し若い世代になると、ジェネリック・リズムとか定型とかにそれほど固執する必要はない、と考える人が多くなって来る。いわゆる自由律俳句の提唱である。なぜ彼等は五七五にこだわらないのかというと、その根本的理由は、日本語の音節と英語のシラブルでは、その性格に相違があるという認識である。一般的に日本語の音節は、英語のシラブルに比べて短い。例えば、野球で使われるストライクということばは、日本語では五音節だが、英語では一つのシラブルにしかならない。「この場合、ごく大ざっぱに言って、英語の一音節に含まれる情報量は、日本語のそれに比べて、ほぼ五対一の関係にある」と、川本皓嗣著『日本詩歌の伝統』に書いてあるとおりである。⁽⁷⁾ だから、十七音節の日本語俳句を英訳すると、ふつうの場合十七音節よりも短くなることが多い。無理に英語でも十七音節にしようとする、何か余計なことばを入れなければならなくなる。例えば、「古池や蛙飛びこむ水の音」を英訳して、ちょうど十七音節にした試みがここにある。

Old pond, ancient pool:
A frog jumping plunges in:
Waterish splash-splash.

なるほど、これは五七五になっているけれども、同じ意味のことばがあちこちで繰り返されていて、いかにも冗漫だし、また不正確でもある。R・H・ブライスは、この英訳を読むと、作者の芭蕉自身が池に落ちたような印象を受けると言っている。⁽⁸⁾

日本語と英語のこうした差異を考慮に入れて、新しい英語俳句のかたちを提唱する人たちが出てきたのは当然である。その一人が、『俳句のかたち』の著者ジョアン・ジローで、彼女によれば、英語で俳句を書きそのシラブルを数える時には、日本語の音節に似た数え方をするべきなのであって、長母音・重子音はすべて二音節として数え、句読点があればそれは一音節とすることを提案した。⁽⁹⁾ 前掲の例でいうと、strike という単語は、重子音と長母音がつずつあるから、合計五音節になる。こういう音節の数え方をすると、英語俳句のシラブル数は十七より多少減ることになるわけだが、その数を具体的に提示したのがボブ・ジョーンズとウィリアム・ヒギンソンである。ジョーンズは、日本の俳句を英訳するにも英語で俳句を書くにも、三五三の合計十一音節くらいが適当ではないかといひ、五七五を字余りの上限とする提案をした。⁽¹⁰⁾ また、ヒギンソンも、英語俳句のシラブルの合計は十から十二くらいが理想で、強音節の数からいうと二三二がよいだろうと考え、それも二三・二とか二・三二とか、途中で休止を置いて切字の効果をもたせるのがよいと言っている。⁽¹¹⁾

これら三人の考えているような英語俳句の例は無数にあるが、ここでは二つの例を挙げるにとどめたい。最初は、ニューヨーク在住の詩人ルース・ヤロウがグランド・キャニオンへ旅行した時に作った句。

canyon dawn:
a bat folding dark
into a crevice

Ruth Yarrow

これには佐藤紘彰による和訳があって、「谷の朝こうもり割れ目に闇を閉じ」。⁽¹²⁾ 次は、ニュージャージー州に住む女流画家アニタ・ヴァージルの作品。

the swan's head
turns away from sunset
to his dark side

Anita Virgil

これにも和訳があって、「向き変えて白鳥の首暗くなる」。佐藤和男訳である。⁽¹³⁾

これらの例を見ても分かるように、ジョーンズやヒギンソンの提唱している英語俳句のかたちにはかなりの巾があり、三五三でも二四二でも三五五でもいいわけである。それならいっそのこと、そうした枠をすっかり取り払ってしまって、百パーセント自由律俳句を書いたらよいではないか、と主張する人々が出て来ても不思議はない。彼等の主張は、20世紀自由詩の理論を根底に置いたもので、詩のかたちは個々の題材に即して自然にかたちづくられるものであり、人為的な型にはめるのは邪道だという趣旨である。そうすると当然、自由律俳句と自由詩はどう違うのかという問いも出てくるわけだが、これに対する答えは、各人の俳句観によってかなり意見が分かれるようである。例えばジョージ・スイードは、俳句の三条件として、読んで一息以上の長さにならず、感覚に基づく映像の併置があり、畏怖や神秘感を作り出すことを挙げて、これらの条件を満たす自由詩が俳句だとしている。⁽¹⁴⁾ スイード自身の作品を一つ。

in the town dump I find a still-beating heart⁽¹⁵⁾

この俳句は、もしこれが俳句といえるなら、その効果を定型とか韻律とかに少しも頼ることなく、もっぱらゴミ捨て場とそこに落ちている生きた心臓のイメージに賭けている。イマジスト俳句の一つの極致であろう。

ここまでくると、ことばの韻律に少しも頼らない「目で見える俳句」が出てきても驚くに当たらない。いわゆる「視覚俳句」またはハイクをもじってアイク (eyeku) と呼ばれるものである。次は、マーリーン・マウンテンの有名な作品。

- 5) Robert Spiess, "Rhythm in Haiku," *American Haiku* 3, no. 2 (1965), 7-15 参照。
- 6) *Ibid* 15.
- 7) 川本皓嗣『日本詩歌の伝統』(岩波書店、1991)、66。
- 8) R. H. Blyth, *A History of Haiku 2* (Tokyo: Hokuseido, 1964). 350.
- 9) Joan Giroux, *The Haiku Form* (Rutland & Tokyo: Tuttle, 1974). 80-81.
- 10) Bob Jones, "Haiku Form," *Modern Haiku* 24, no. 1 (winter-spring 1993), 14.
- 11) William J. Higginson, *The Haiku Handbook* (New York: McGraw-Hill, 1985), 105.
- 12) 佐藤紘彰『英語俳句』(サイマル出版会、1987)、125-26。
- 13) 佐藤和夫『海を越えた俳句』(丸善、1991)、219。
- 14) 前出『英語俳句』、75-76。
- 15) *The Haiku Anthology*, 240.
- 16) *Ibid*, 156.
- 17) Dorothy Howard and André Duhaime, eds., *Haiku: Canadian Anthology*, 60.